特集　リスタートの極意

第３章

「チャットモンチー」のベーシスト，「自分らしく」地元に貢献

イベントスペース「OLUYO」社長／音楽家　福岡 晃子 さん

勝田　慶
千葉県中小企業診断士協会

１．経験と人脈を徳島に還元したい

「自分がハブになって，知ってきたこと，見てきたことを徳島の人につなげたい」

メジャーデビュー以降，映画やCMタイアップ作品などを数多く発表し，2000～2010年代を代表するガールズバンド「チャットモンチー」のベーシストとして最前線に立ってきた福岡晃子さんは，現在の活動に対する思いを語ってくれた。

2016年，福岡さんはバンド活動と並行して地元・徳島にイベントスペース「OLUYO」（オルヨ）を開業した。きっかけは，地元が元気になってほしいという思いからだ。自身が学生時代まで過ごした徳島で，若い世代が夢を持つための機会を作り，また，県外から人を呼んで魅力を知ってもらえればと考えた。

徳島で多方面に活躍する福岡晃子さん（画像提供：福岡晃子，以下同。撮影：weathershop/shintarowfresh）

当時から月に１度，東京で知り合ったアーティストやさまざまな職業の人とトークショーやワークショップ，ライブなどを行っている。キャパシティが40人ほどの小スペースのため，参加者全員の顔が見えて，相互にコミュニケーションを取りながら楽しんでもらえるイベントを企画することが多い。

「どうすれば参加した人に楽しんでもらえるか考えたり，県外から来てくれたお客さんに徳島のお勧めの場所やおいしいお店を紹介したりするのが好きです」と明るく語る福岡さんの姿が印象的だった。

２．結婚・出産・コロナ禍で地元へ

⑴　帰るつもりはなかった地元

「OLUYO」開業後も，福岡さんは当時，徳島に拠点を移すことは考えていなかった。

「バンドとして『成功したい』という思いが強くあって，そのためには都会で多様な人の中でもまれながら挑戦し続けたい，し続けるしかないと思っていました」

上京しメジャーデビューしてから約15年間，常にバンドの活動を第一に考え，いかにファンに良い音楽作品を届けられるかに生活のすべてを注いでいた。その中で，徳島での凱旋イベントとして音楽フェスも企画・開催したが，あくまで活動の中心は東京だと考えていたという。

⑵　コロナ禍を機に再発見した徳島の魅力

その後，2018年にバンドが「完結」し，福岡さん個人での活動を開始した。また，そのタイミングで結婚し，第１子の出産を経験した。その中で，2020年に世界中に到来したコロナ禍が福岡さんの生活を一変させた。

外出や人との接触が制限され，当時受けていた楽曲提供などの仕事はすべてリモートになったことで，「東京」という場所に縛られなくても仕事ができるのでは，と考え始めていた。

その頃に里帰りの機会があった。当時は県外からの来県者への風当たりも強かったが，たまたま家族で訪れた徳島の海が見える街に強く引かれ，「ここに住みたい」と感じた。生まれ故郷からは離れた土地で知り合いもいなかったが，その場の勢いで移住を決めた。

「学生の時は『徳島って何もないな』と言っていました。今思うと，それはまだ何者でもない自分と地元がリンクして，ある種の劣等感もあったのかなと思います。しかし，いざ帰ってきてみると，豊かな自然と活動的な人たち，深い文化が数多くあると気づきました。今は知れば知るほどとても面白いです」

徳島県は女性が社長を務める会社の割合が全国で最も高い（帝国データバンク「全国『女性社長』分析調査」より）こともあり，エネルギッシュな女性経営者から刺激を受けたり，スピード感のある意思決定で企画が進んだりすることが多いという。

また，2003年に「ゼロ・ウェイスト宣言」を行い，町全体でごみ削減や無駄，浪費をなくす活動に取り組んできた上勝町など，全国的にも発信力のある自治体が増えたことで，徳島の魅力を発信しやすくなったという。

３．仕事観の「変化」と「変わらぬこと」

⑴　出産・育児から「自分」に向き合う

「チャットモンチー」の活動中は常にバンド中心の生活であったが，出産・育児を経験して，福岡さんは仕事観も大きく変わった。

徳島の伝統文化である藍染プロデューサー・永原レキさん（中央）との交流（福岡さんは左から２番目）

「今は子どもが生活のすべてを占めているため，その中で無理せず活動できればいいなと思うようになりました。また，子どもと接していると，自分のいいところにも悪いところにも向き合って受け入れられるようになりました。仕事は頑張れば理想をかなえられる部分も多いですが，子どものことは自分ではどうにもならないことが多いから，そういったことに向き合うことで自分自身が強くなったと思います」

また，楽曲制作に対するアプローチにも変化があった。バンド時代は常に観客・聞き手を意識して，楽曲を小説のように構成を練り上げて作っていたが，現在はエッセイを書くように，自身の内面にある感覚に素直に曲を作っている。

一時期は「自分は何で音楽をやりたいのか」とまで考え，制作の手が止まっていた時もあったという。その中で，移住後に徳島の自然や人との触れ合いを経て，改めて「音楽をやりたいからやる」と考えられるようになった。そして2023年に入り楽曲制作を再開し，５月に初のソロアルバムを発表，11月からは個人として初の全国ツアーを実施するなど，精力的に活動している。

「音楽をやっていればどこにいても世界とつながれることが改めてわかりました。忙しくなるとどうしても悩んでしまって視野が狭

くなり，自分も小さくなる感覚があるのです。徳島の自然の中で活動するのが自分には向いていたのかなと思います。なんであんなに『東京でしかできない』と考えていたのかな，と思うほど，これまでにない新しい感覚や活力が生まれていて，今がこれまでで一番活発に動けています」

そう語る福岡さんの表情はとても晴れやかだ。

⑵　細部の積み重ねで感情を揺さぶる

一方で，仕事に向き合ううえでのスタンスは，バンド活動を通じて培われたところが大きいと福岡さんは語る。

「ライブでは，すごく細かいことの積み重ねでお客さんに感動してもらえると思っています。内容はもちろんですが，たとえば，お客さんの表情を見てスタッフの方が空調の温度を１度上下させたりしていました。人の感情を揺さぶるためには，自分がいかに細かい仕事を積み重ねるかが大事だということを学び，今の活動にも生かしています」

これは，常に観客やビジネスパートナーに対して尊敬の念を持って真摯に仕事に向き合い，細部にこだわってきたこと，そしてその結果がリアクションとして返ってきた確かな実体験があるからこそ，福岡さんの中に育まれた仕事観だろう。

⑶　あえて「よそ者」として

また，徳島で活動するにあたって，福岡さんはあえて自分が「よそ者」であることを意識しているという。

「バンド時代に徳島で音楽フェスを開催しようと思い立った時にも，ずっと東京で活動してきて，いきなり徳島で開催することに対して，徳島への誠実さに欠けるのではと考えていました。そこで，２，３年かけて地元の人と交流を持ったり，事前にイベントを企画したりしてからフェスを開催しました。移住後も同じで，約15年徳島を離れていたから，自分はもはや『よそ者』だと思っています。まずはその土地と人の間に根づいて，どういう思いや考えを持って暮らしているかをよく聞き，その人たちの意見を大事にしたいと考えています。そのうえで，さらに良くなるための提案ができればと思っています」

そうして近所の方や行政の関係者，「OLUYO」のある商店街の関係者とも交流を深めており，今ではすっかり地元のコミュニティに欠かせないメンバーの一員として徳島の暮らしと自然になじんでいる。

地域活性化の一環として文化祭でのライブなども行っている。

４.「自分らしい判断」をするために

⑴　平常運転で自分なりの地域貢献を

福岡さんは2024年，個人としても「OLUYO」の代表としても，徳島のPRや地域を巻き込んだ活動に力を入れていきたいと語る。たとえば，徳島で活躍する職人やアーティストを主演に起用し，作業や創作風景をドキュメンタリー形式で撮影して，自身の楽曲と合わせたミュージックビデオとして映像作品にする「Moment Series」を継続し，徳島の文化を伝えていきたいと考えている。

また，「OLUYO」でのイベントについても，店舗単体ではなく店舗がある商店街の規模まで広げたものにしていきたいという。これらの活動方針に至ったのは次のような理由からである。

「結局，私が徳島の良さをPRしたり，単

発でたくさんの人に徳島に来たりしてもらったとしても，その後，継続して徳島と交流してくれる人が増えないと意味がないのではと感じています。ですから，徳島の面白い場所や文化をつないでいる人がいることを広められるような企画をこれからも考えていきたいと思っています」

また，ライブツアー開催を発表したところ，数多くのオファーを受けたものの行けなかった場所があったとのことで，2024年はライブを通じてさまざまな場所に出向きたい，新たな出会いを作っていきたいという。

このように活動の幅はどんどんと広げていきたいが，福岡さんは自身と家族の生活を第一に，無理せず「平常運転」で活動を続けることを意識していきたい，と語ってくれた。

徳島の文化と人を紹介する「Moment Series」

⑵　波に乗る瞬間を見逃さない

さらにその先どのように活動していきたいか，という問いに対しては，「もちろん徳島は拠点にしたいと思っています。しかし，コロナ禍の前後で世の中が大きく変わったように，これから未来がどうなるかわからないですし，どこにいるかもわからないから，どんなことが起きても柔軟に，そのときに『自分らしい判断』ができるようにしていたいです」と答えてくれた。

そして漠然とではあるが，これまで取り組み続けてきた音楽で悩める人々に寄り添う「音楽療法士」の資格を取得して活動できればと考えているという。

最後に，これからリスタートを考えている人に対するメッセージを聞いた。

「新しいことをしたいけれども悩んで不安な人は，まずは頭の片隅にその思いを抱えておいて，何かのきっかけで『今かも』というタイミングが来たときに，その波に乗るべき瞬間を見逃さないように準備しておくのがいいのではないでしょうか。新しいことを始めるときには『失敗』ということは絶対になくて，すべてを肯定していいと思っています。自分がこれをやりたい，このタイミングしかないと思うときに動けたら周りの目も気にならなくなるはずです」

まず目の前の活動に真剣に取り組み，その中で「自分らしさ」を見つけること，挑戦するタイミングだと感じたら思い切って一歩踏み出すこと，そして自分の挑戦を肯定することが「リスタート」のためには大事なのだという福岡さんからのアドバイスをいただいた。変化の激しい現代において，挑戦する中小企業を支援する中小企業診断士として，また，診断士自身のキャリアを考えるうえでも参考になるのではないだろうか。

福岡 晃子
（ふくおか あきこ）

徳島県徳島市出身。イベントスペース「OLUYO」社長，作詞作曲家，演奏家。2002年から2018年まで「チャットモンチー」のメンバーとして活動。2016年に徳島に「OLUYO」を開設。2020年に徳島に移住し，ソロアーティスト「accobin」としての音楽活動と徳島の知名度向上，地域活性化に向けた取組みを行っている。

勝田　慶
（かつた けい）

1988年三重県生まれ。大学卒業後，鉄鋼メーカーに勤務。工場人事・協力会社連携・国内外営業・事業管理に従事。2022年中小企業診断士登録。企業内診断士として活動中。